

Web版

一本道

第4号 通巻74号

今年観た映画の中で特に印象に残っているのが「[教皇選挙](#)（2024）」です。

心臓発作で急逝したローマ教皇を受け、英国出身の枢機卿トマス・ローレンスが次期教皇選出のコンクラーベを執行。会場となるシスティーナ礼拝堂には、リベラル派ベリーニ、保守派アデイエミ、中道トランブレ、伝統派テデスコなど有力候補が集結。裏で差別や買収、秘密が交錯する中、謎のメキシコ生まれベニテス枢機卿が前教皇に秘密裏に任命された人物として浮上。驚くべき結末へと展開する。

ローマ・カトリック教会では教皇が死去した場合、次の教皇を選ぶ選挙「[コンクラーベ](#)（教皇選挙）」がバチカンのシスティーナ礼拝堂にて行われます。現実でも今年（2025）5月にフランシスコ教皇の死去に伴い教皇選挙が行われ、第267代目のローマ教皇「レオ14世」が選出されました。



システィーナ礼拝堂／バチカン

先日の自民党総裁選でもそうでしたが、ローマ・カトリック教会の世界でも（ついでに言うと浄土真宗大谷派の世界でも）選挙となれば、各々の思惑や利

害が複雑に絡み合う事態となります。伝統を重んじる保守派がいれば、新たな時代を求める改革派もいますし、穏健派、強硬派などそれぞれが譲りません。世界各地から枢機卿団が招集され参加者は108名、教皇選挙は立候補制ではなく、参加者全員に選挙権と被選挙権があり、無記名投票によって全体の3分の2以上を得られた新教皇が決まるまで、何日も（映画では3日間）隔離選挙が続きます。そんな中、主席枢機卿である主人公ローレンスは教皇選挙を執行する責任者となります。

ローレンス枢機卿は責任者として開幕の説教をしなくてはなりません。この説教は教皇選挙の趨勢に影響を与えるだけでなく、新教皇選出後のローマ・カトリック教会の方向性にもかかわる重責です。彼は「確信と疑念は対立するものではなく、信の中に共存する」と参加者に語りかけるのです。彼は実は自分の信仰に疑いを持っており、前教皇に辞任を申し出ようとしていました。そして彼の眼には現在の教会の在り方が、確信という名の執着として映っていたのではないのでしょうか。彼は、信じたいが、信じきれずに苦しんでいる一人の人間なのです。

私はこのシーンを観た時に、「これは他力浄土門の世界だ」と強く感じました。ローレンス枢機卿の言葉に、29歳で比叡山を下りられた親鸞聖人の姿が重なったのです。9歳で出家し20年間厳しい修行を続けた聖人が、何故山を下りる決断をしたのか。聖人の比叡山での修業時代を記す史料が乏しいため推測になってしまうのですが、当時の天台教団は国家鎮護・密教儀礼・寺院政治の中心であり、宗教的・政治的権力が肥大化していたことへの不信、厳格化した戒律主義への疑問、法然上人に代表される浄土教への新しい宗教的方向性の模索、そして何よりこれまで頼みとしてきた自力での修業への限界に対する内面での葛藤が大きかったのではないかと思います。

す。これまで確かなものと一心に握りしめていたものに疑いが生じたということです。

親鸞聖人は自らの確信に疑いをもち比叡山を下り、六角堂（頂法寺）での参籠、救世観音大菩薩の夢告の勧めによって法然上人に出あい、「称名念仏」「他力本願」の教えに出会い、仏道の歩みが始まりました。

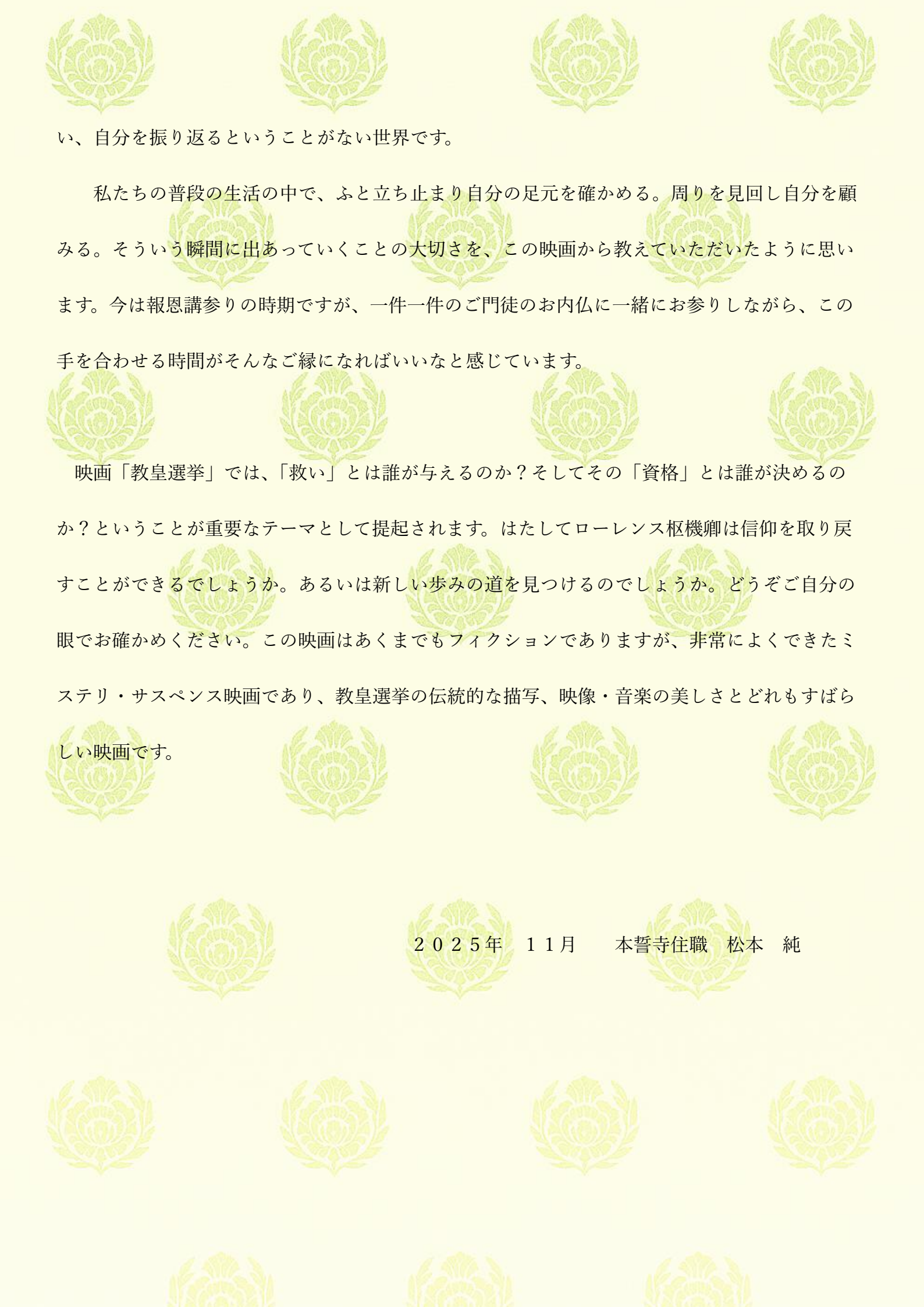


六角堂（頂法寺）／京都市

今、『一本道』で講演録を掲載させていただいている大窪康充先生は「仏教2500年の歴史とは、人間が自らの誤りに目覚めてきた、自分の思い込みによる正義・正論を問い質してきた歴史だ」と仰います。釈尊、七高僧といった偉大な先達もみな自らの誤りを、過ちを認めたところから歩みが始まったそうです。

「疑う」という行為にネガティブな響きを感じる方もいるかもしれません。しかし「私は信ずるも疑う」という言葉に矛盾はありません。私の身には何もなく、ただ願力に乗ずるのみという他力本願の世界に重なっています。信心すらも疑いの中から生まれ、その疑いもまた阿弥陀仏に包まれているのだと思います。言い換えれば、疑いながらも念仏に身をまかせる人になるということではないでしょうか。

現代の SNS 社会を冷静に俯瞰してみると、正義が正義と戦っているように感じます。自分の確かな思いを振りかざし、他者を否定するばかりで、前に向かって歩みだすことができない時代です。「信念を持つ」ということは立派なことですし、大切なことですが、信念を絶対的なものだとすることは執着にとらわれるということと変わりありません。視野が狭くなり周囲が見えな



い、自分を振り返るということがない世界です。

私たちの普段の生活の中で、ふと立ち止まり自分の足元を確かめる。周りを見回し自分を顧みる。そういう瞬間に出あっていくことの大切さを、この映画から教えていただいたように思います。今は報恩講参りの時期ですが、一件一件のご門徒のお内仏に一緒にお参りしながら、この手を合わせる時間がそんなご縁になればいいなと感じています。

映画「教皇選挙」では、「救い」とは誰が与えるのか？そしてその「資格」とは誰が決めるのか？ということが重要なテーマとして提起されます。はたしてローレンス枢機卿は信仰を取り戻すことができるのでしょうか。あるいは新しい歩みの道を見つけるのでしょうか。どうぞご自分の眼でお確かめください。この映画はあくまでもフィクションではありますが、非常によくできたミステリ・サスペンス映画であり、教皇選挙の伝統的な描写、映像・音楽の美しさとどれも素晴らしい映画です。

2025年 11月 本誓寺住職 松本 純